

教員養成系大学におけるボランティアを核としたキャリア教育の実践 Practice of career education that centers on volunteer at university of education

河崎智恵* 岩本廣美** 仲川元庸***

奈良教育大学大学院教育学研究科* 奈良教育大学教育学部** (前)奈良NPOセンター***

Tomoe Kawasaki* Hiromi Iwamoto** Motonobu Nakagawa***

School of Professional Development in Education, Nara University of Education*

Faculty of Education, Nara University of Education**

Nara NPO Center ***

くあらまし>本研究ではライフキャリアの視点より教員養成大学のキャリア教育を捉えなおし、ライフキャリア教育の概念提示に基づき、自己開発とともに他者支援（ケア）の方向性をもつキャリア教育の枠組みを提示した。

それらに基づき、ボランティアを核としたキャリア教育プログラム「ボランティア概論」「ボランティア実践」を構想、実施した。教育実践の結果、受講生はプログラムを通して、1. ボランティアに対する期待感、2. 他者や仕事との躊躇・戸惑い、3. 自己に対する挫折感・無能力感、4. 仕事に対する意欲の向上、5. 仕事を達成したときの満足感、6. 自己を高めるための向上心の芽生え・充実感、という過程を辿って学びを深めていた。また、ボランティア経験はキャリアに対する学生の意識を高め、特に「新しい発見・気づき」が学生たちの意識変化に大きく関わっていることが明らかになった。

キーワード: キャリア教育 Career Education ボランティア Volunteer

1. はじめに

ボランティア活動はキャリア教育の重要な課題であるにもかかわらず、これまでキャリア教育の内容は主に職業キャリアにおける自己実現に焦点が当てられ、十分な検討は行われてこなかった。21世紀のキャリア教育は、共生社会へ向けて自己開発のみならず、自らのキャリアにボランティア活動を位置づけ、ケアする力を育成することが課題となる。

ケアリングをもとに学校教育を捉え直した Noddings (1984)は、教育の最大目標はケアリングの維持向上であるとし、ケアを練習するための具体的活動として職業に関わる奉仕活動の意義を提言している。そこでの労働は職業的に適した技能の獲得を目指すのではなく、ケアする力をつけるための準備活動であることが期待されると述べ、ボランティアをキャリア教育に導入・位置づける必要性を示唆している。

また、これまでのキャリア教育では、キャリア教育の担い手として、発信側に立つ人材へのより実践的な取り組みが欠如していた点も看過できない。キャリア教育においてケアの力を育成するとともに、さらにボランティアリーダー、キャリア教育推進者としての能力を育むシステム構築も急務である。

2. 研究の目的・方法

このような教育課題に対し、本研究ではキャリア教育の在り方を再検討した上で、地域連携により、教員養成大学におけるボランティアを核としたキャリア教育プログラムを構想し、授業実践の上、課題を明らかにすることを目的とする。

まず、先行研究をもとに、ライフキャリアの視点よりキャリア教育を捉えなおし、教員養成大学（奈良教育大学）におけるキャリア教育の枠組みを提示した。それらに基づき、奈良県内 NPO 団体の全面的協力を得て、キャリア教育プログラム「ボランティア概論」「ボランティア実践」を構想した。

平成20年度～21年度に、奈良教育大学において授業実践を行い、ボランティア・インターンシップ（以下、インターンシップ）の実施期間（平成20年10月～12月）に参与観察とともに、プログラムの記録シートを質的に分析し、学びのプロセスおよびキャリア発達への影響を明らかにした。また、平成21年1月、実施団体へのインタビューを行い、実施団体側からの成果と課題を示した。

3. 教員養成大学におけるキャリア教育枠組みの構想

前述のように、ボランティアの教育的意義、とりわけ職業にかかわる奉仕活動の意義が示されているが、キャリア教育におけるボランティアの意義については、これまでほとんど論じられることはなかった。

近年になり、河崎(2010)は、大学生を対象として実施した質問紙調査を分析して、ボランティアの教育的意義を明確にしている。具体的には、1. 因子分析により、ライフキャリアの能力領域に関する尺度を構成し、2. 構成した尺度を用いてキャリアに関する経験・活動による差異を分析した。その結果、ボランティア活動やインターンシップ、あるいはアルバイト経験等は同様に啓発的経験として捉えられているが、それぞれの経験は多くの異なる領域に関与しており、相互に補完的な関係となり異なる教育的特質を持つことが示唆された。すなわち、キャリアに関する経験の中でも、ボランティア経験は、肯定的な自己理解や人間関係をもとにライフバランスや将来展望など将来への意欲・態度に関わり、勤労観の形成に寄与するとみなされる。また、就労的教育経験および実際の就労経験は、共通して情報収集や啓発的経験への態度等、職業観の形成に関与するものと判断された。

また、河崎(印刷中)は、「自己理解」「人間関係」「意思決定」「就業開発」「生活実践」「キャリア統合」の6領域より、自己開発とともに他者支援(ケア)の方向性をもつ、ライフキャリア教育の概念モデルを構想している。これらの6領域は、自己開発の側面と同時に、他者支援や世話など、他者との関係性発達の側面が包含されている。具体的には、6領域のうち「自己理解」や「就業開発」は、主に自己に視点が向けられた能力であり「個の発達」の側面が強い。一方、「人間関係」「生活実践」は、他者支援の方向性を持ち、「関係性の発達」に関わると判断できる。「意思決定」および「キャリア統合」は、「個」と「関係性」の双方向性をもつ鍵的な役割を担い、「自己理解」や「就業開発」において得られた情報や技能と、「人間関係」「生活実践」の知識や経験を循環的に結びつけ、「意思決定」し、「キャリア統合」をめざすという関係にある。

これらは、全て基礎的な学力や体力が基盤となり形成されるものと考えられる。したがって、教員養成大学でキャリア教育を検討していくにあたっては、図1のような概念モデルを用いることとした。

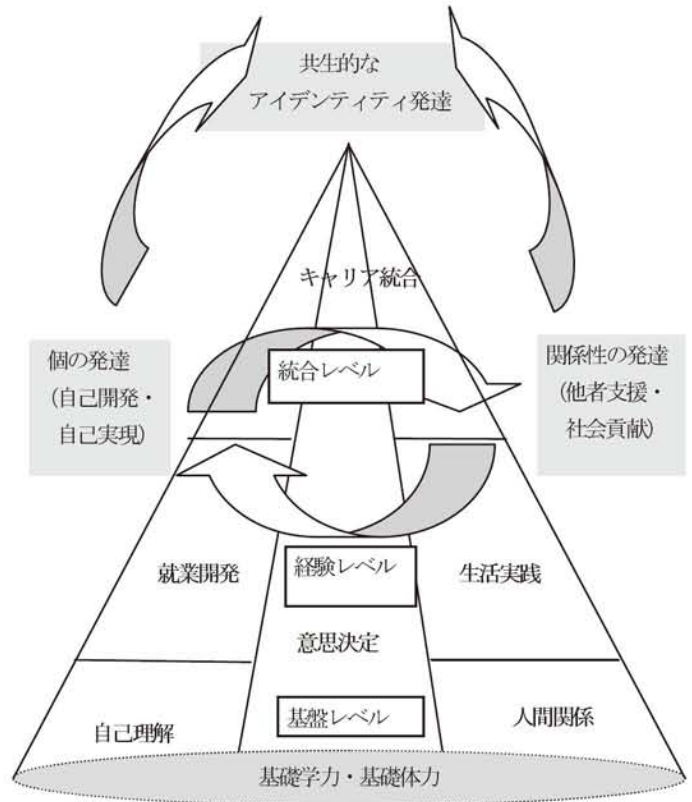
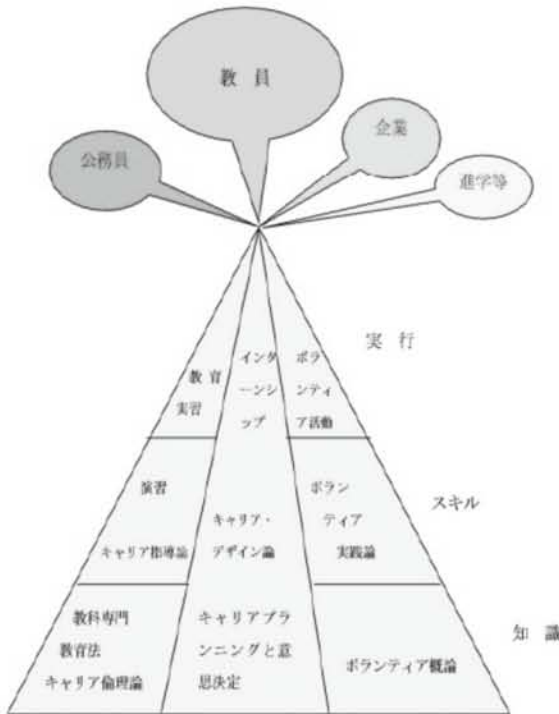


図1 教員養成大学におけるキャリア教育の概念モデル

特に、教員養成においては、自己開発はもちろんのこと、児童、生徒をケアする力が求められる。そこで、キャリアに関する体験を、啓発的経験(体験型)からケアに参画する経験(ケア参画型)へと発展させ、社会への貢献をめざすこととした。その特徴は、自己実現から他者支援への方向性、および自己開発から社会参画・醸成への方向性、を持つ点である。特に教員および教育に関する職業は、自己を成長させる力とともに、他者をケアしていく力が求められる。これらの取り組みは、教員養成大学の役割を果たすキャリア教育とみなすことができる。

このようなキャリア教育を実現するために、教員という専門職開発に関わる「アカデミックキャリア」(左の柱)と、ケアに関わる経験としてボランティアを核とした「ケアサービスキャリア」(右の柱)、そしてこれらの学びを関係づける「キャリアデザイン」(中央の柱)を位置づけ、組織的及び体系的な支援を目標とし、図2のような枠組みを提示した。これらの3つの学びが、三位一体となり統合されるよう、教員養成大学(奈良教育大学)のキャリア教育カリキュラム・プログラムを検討した。



アカデミックキャリア キャリアデザイン ケアサービスキャリア

図2 教員養成大学におけるキャリア教育の枠組み

第一の柱（左の柱）である、アカデミックキャリアについては、既に実施している基礎ゼミナール、専門科目、演習、教育実習等が相当する。

これらの科目に加えて、第2の柱（中央の柱）「キャリアデザイン」に関する科目として、平成17年度より、主に1, 2回生を対象に「キャリアプランニングと意思決定」（教養科目）を実施してきた。平成21年度からは、主に3, 4回生を対象とし、「キャリアデザイン」（教養科目）も実施して、成果を得ている。

これらの教育評価については、平成20年度～平成21年度に「キャリアプランニングと意思決定」「キャリアデザイン」の授業評価アンケートを実施した。いずれの授業においても、「あなたはこの授業にどの程度満足しましたか」「この授業を通して、感銘・感動を得ることがありましたか」に対して、高い評価をしている学生が多かった。「この授業から新しい知識や考え方を得ることができましたか」「この授業から教育観や教育実践に関する新たな知見を得ることができましたか」の項目についても、ほとんどの学生が高い評価をしており、「知識・概念レベル」での成果が十分に認められた。また「この授業によって、あなたの授業外での考えや行動に影響・変化がありましたか」の項目でも、多くの学生が変化を感じていることより、

「実践レベル」での成果も見出せたといえる。

全体として、これらのキャリアに関する科目に対する学生の評価は高い傾向にあり、アカデミックキャリア、およびキャリアデザインに関しては、成果が認められた。

4. ボランティアを核としたキャリア教育の実践

4. 1. プログラムの構想・実施

第3の柱（右の柱）である「ケアサービスキャリア」に関する科目として、平成20年度より、「ボランティア実践」（教養科目）、「ボランティア概論」（教養科目）を構想し、平成20年度～21年度に奈良教育大学において授業を実施した。

表1はボランティア概論の授業概要である。ボランティア概論では、主に様々な方面における、ボランティア、主にNPO活動について学び、自分のキャリアの幅を広げることをめざした。ボランティア概論では、この講義では前期でボランティアとは何か、NPO団体とはどのような組織なのか等を学ぶとともに、ゲスト講師を招いて多様な市民活動の概要や社会的役割などについて知る機会を設けた。

表1 『ボランティア概論』の授業概容

授業担当代表者：河崎智恵	
授業計画	
1.オリエンテーション	授業のガイダンス・ボランティアとは
2.ボランティア・NPOとは	NPOの歴史・制度・社会的役割とその現状
3.環境問題・自然保護とNPO	
4.国際交流・地域の国際化とNPO	
5.国際協力・海外援助とNPO	
6.人権問題・ジェンダーとNPO	
7.まちづくりとNPO	
8.地域福祉とNPO	
9.健康・保健・医療とNPO	
10.子育て支援とNPO	
11.教育とNPO	
12.職業としてのNPO・社会的起業	
13.CSR・企業の社会貢献活動	
14.インターンシップに向けて	NPOでのインターンシップの役割
15.まとめとテスト	

表2はボランティア実践の概要である。ボランティア実践では前期でNPO・ボランティアについて学んだことをふまえ、実際に関心をもった分野のNPOでフィールドワークやフィールドリサーチを通して、更に深く研究や調査を行う。実践に行く前の事前指導の

のち、各フィールドでの演習(インターンシップ)を行った。前期講義とあわせ、年間で理論と実践の両面からNPO・ボランティア活動について学び、社会参加にむけての理解と意欲を広げ、課題解決に主体的に行動する市民を育成することを目標とした。

表2 『ボランティア実践』の授業概要

授業担代表者：岩本廣美	
授業計画	
1.オリエンテーション	授業の狙い・評価方法について
2.インターンシップに向けて(1)	NPOとは①・受け入れ先紹介
3.インターンシップに向けて(2)	NPOとは②・活動の心得
4.～13.フィールドワーク(インターンシップ)	活動先団体との日程調整で決定
14.発表・まとめ①	
15.発表・まとめ②	

また、表3はインターンシップの受け入れ先を一覧で示している。ボランティアとして実践する活動は、環境、福祉、子育てなど多岐にわたる内容で、いずれも他者支援に関わる活動となっている。実施にあたっては、受け入れ先の調整から活動に至るまで、奈良NPOセンターの全面的な協力を得た。

表3 インターンシップの受け入れ状況

	受け入れ団体	活動分野	活動日
1	NPO法人アトリエマーケットNPO	ものづくり	11月1・2・3・15・16日
2	NPO法人ストップ温暖化の会(NASO)	環境	10月10・14～17・18日
3	夢咲塾	まちづくり	10月19・20日11月9・26日
4	大和高原文化の会	まちづくり	11月1・8・15・22・29日12月6日
5	ナラ・ファミリー&フレンド	外国人支援	10月5日～
6	たんぽぽの家	福祉	10月18・25日11月1・8・15日
7	NPO法人奈良NPOセンター	子育て	10月25日(本番)以前1週間
8	奈良ダルク	医療	10月20日～
9	NPO法人地域活動支援センターふろぼの	福祉	10月20日～
10	日本グッドトイ委員会奈良支部	ものづくり、福祉	10月21日～
11	One Dish Aid食器リサイクルの会	環境	11月1・8・22日

4. 2. ボランティアによる学びのプロセス

写真1は、福祉施設でのボランティアの風景である。学生は、このようなボランティア実践を得てどのような学びを得たのであろうか。

平成20年10月～12月に、プログラムの記録シートに、毎回感想を自由記述するように依頼した。その自由記述を、質的研究法(グラウンデッド・セオリー)を用いて分析した。具体的には、一文一文をコード化して、中心のカテゴリーを検出した。中心のカテゴリーをもとに、対象者をグループごとに分類し、モデルの構築を試みた。

以上の手続きにより、心境の変化に着眼して、30時間におけるインターンシップによる各個人の意識変化を分析すると、3つの代表的なプロセスが認められた。



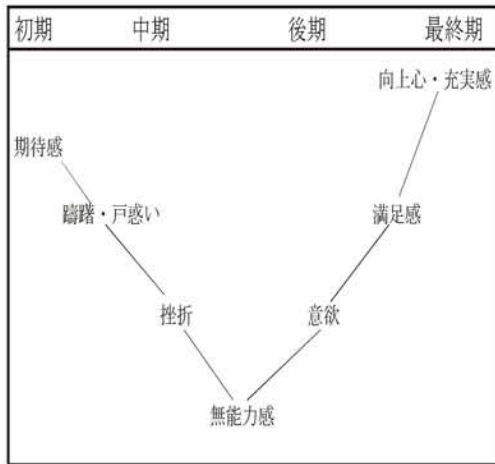
写真1 ボランティアの実施風景

まず、第1のタイプでは、図3に示すように、「期待感」に満ちてボランティアの現場にはいったとたん、「いざ何をすればよいのか考えてみると、とても難しい」と、現実を前に「戸惑い」や「挫折」を感じ、いったんは無能力感に陥るプロセスが認められた。

このように一度心理的に不安定な状況に陥るものの、その後のボランティア経験のなかで、徐々に意欲をとりもどし、最終的には満足感とともに、「次はもっと頑張りたい」「学んだことは、これからしっかりいかしていきたい」という向上心を得ていた。

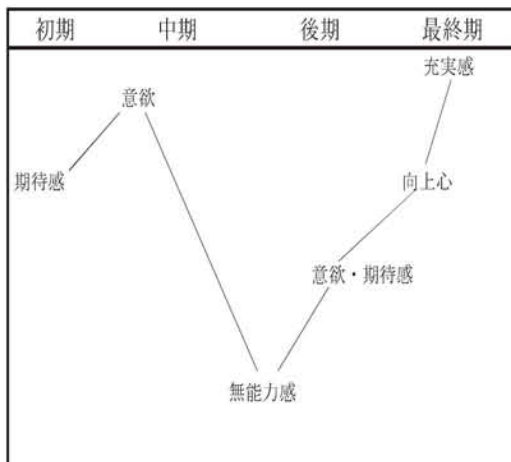
このようなプロセスは、就職後にみられるリアリティショックと類似した点があることより、「リアリティショック型」とした。この型の学生は、全体の約20%認められた。

図3 ボランティアにおける意識変化：
タイプⅠ「リアリティショック型」



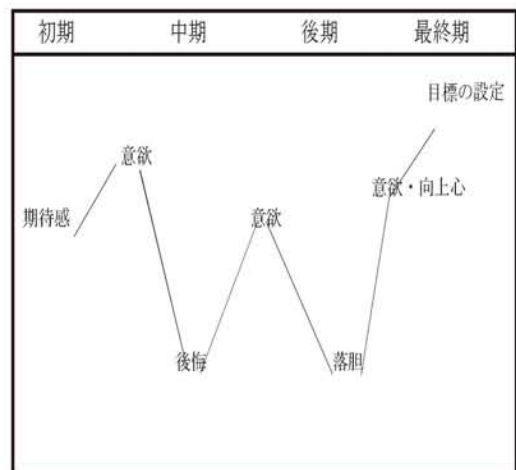
第2のタイプは、図4に示すように、期待感を持って実践に入った後、さらに「こうしてみたい」といった意欲を高めるが、その後、考えたことがスムーズに行えず、その結果、ボランティアに参加したこと自体を後悔し、「無能力感」に陥る。しかし、周囲の援助を得つつ、徐々に意欲をとりもどしていき、最終的には「向上心」をもって、充実した取り組みを行うことができた。このプロセスでは、期待をもって取り組む過程で新たな問題に直面するという葛藤経験、およびその克服が顕著であるため「葛藤克服型」とみなした。この型の学生は、全体の約35%認められた。

図4 ボランティアにおける意識変化：
タイプⅡ「葛藤克服型」



第3のタイプは、図5に示すように、意欲と後悔・落胆を繰り返すという特徴がある。複数回の葛藤経験を経た結果、最終的に、向上心を持って取り組めるようになるだけでなく、さらなる明確な目標設定へとつながっていた。この型では、螺旋的な葛藤経験を経て自己を向上させていることより「螺旋式葛藤克服型」とした。この型の学生は、全体の約40%認められた。

図5 ボランティアにおける意識変化：
タイプⅢ「螺旋式葛藤克服型」



いずれのタイプにおいても、挫折や戸惑いなどを体験することによって一度は心理的に不安定な状態に陥っている。しかし、そこから奮起し、新たな意欲を持つことにより、向上心へとつながることが示された。またその向上心が、充実感や新たな自己の目標設定の契機となっていた。さらに葛藤と克服のプロセスを繰り返すことにより、螺旋的に自己の見直しを図り、自己の問題解決能力が高まっていることが示唆された。

このような、受講生の学びのプロセスを整理すると、図6のように示すことができる。プログラムを通して、1. ボランティアに対する期待感、2. 他者や仕事との躊躇・戸惑い、3. 自己に対する挫折感・無能力感、4. 仕事に対する意欲の向上、5. 仕事を達成したときの満足感、6. 自己を高めるための向上心の芽生え・充実感、という過程を辿って学びを深めていったといえよう。

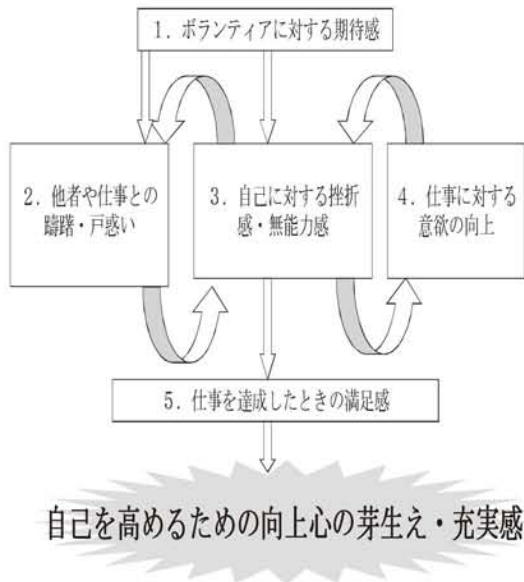


図6 ボランティアにおける学びのプロセス

しかし、上述の3つの型に属さない学生も約5%認められたため、さらにプログラムの記録シートの内容をKJ法にて整理し、学生全体の認識変化を示した（図7）。

まず、ボランティアに興味・期待感がある学生はインターンシップに対する目的意識が存在する。そのため、葛藤を経ながらも、「新しい発見」により自分の目標設定を行い、「楽しい」や「面白い」などといったボランティアに対して肯定的なイメージを抱く。そして、次の段階としてボランティアに興味を抱くことにより、次の参加意欲へとつながっていた。このような段階をたどる学生は将来の明確なビジョンを抱いていた。

それに対して、上述のいずれの型にも属さない学生、すなわち興味や期待感、関心が全く認められない学生は、ボランティアの経験が乏しく、将来に対して明確なビジョンを持ちえておらず、インターンシップによる意識変化も見られなかった。このことから、ボランティアに対する参加意欲、意識付けは、事前教育における重要な要素であることが明らかである。

以上のように、インターンシップにおいて「新しい発見・気づき」が学生たちの意識変化に大きく関わっており、インターンシップを行う上で活動意欲の向上に寄与することが示された。

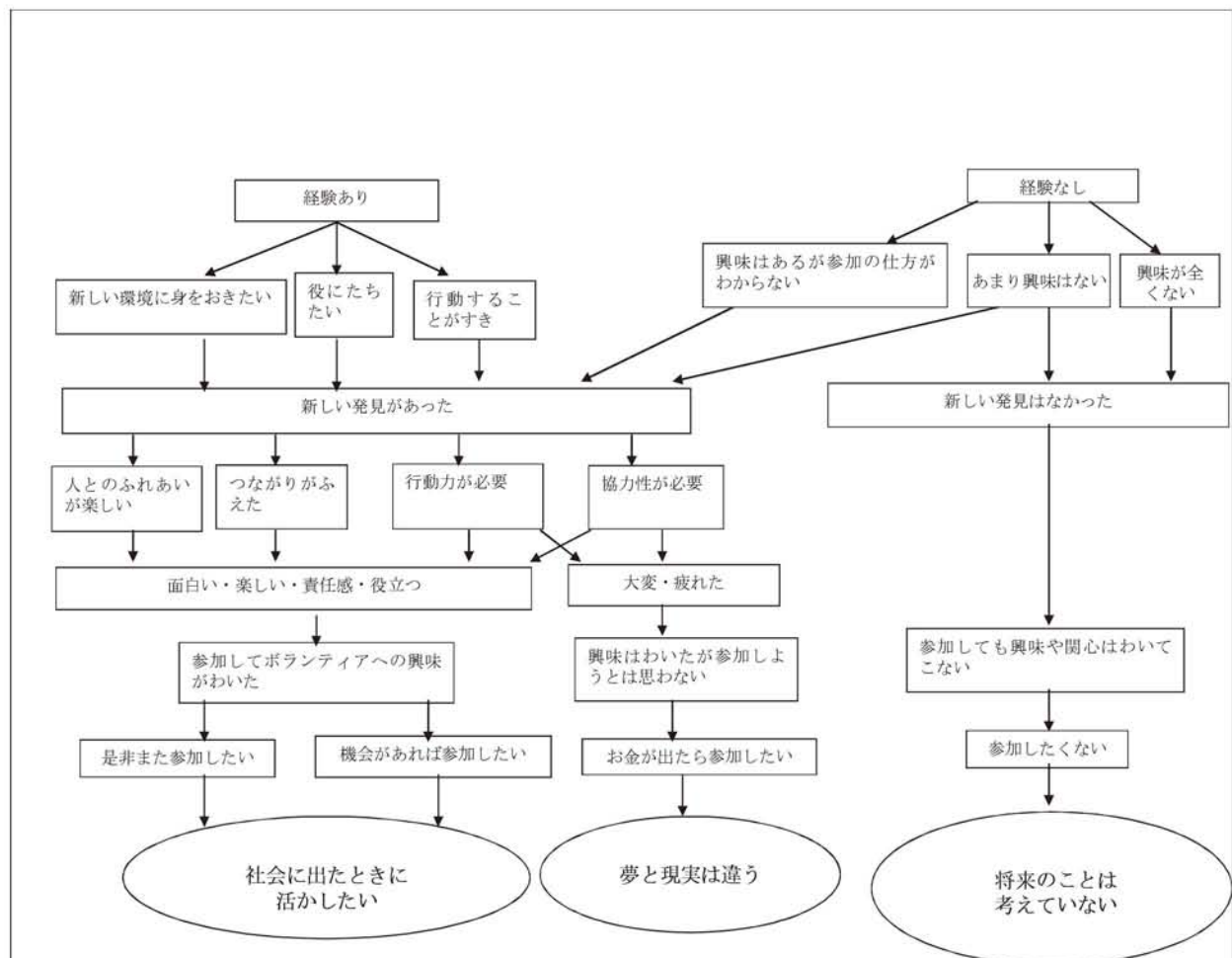


図7 ボランティアにおける学生の認識変化（全体）

4. 3. 受け入れ団体からみたインターンシップの成果と課題

平成20年1月に、実施団体の代表者にインタビューを行い、インターンシップの成果と課題について分析した。インタビューの内容は、1. 受け入れ団体にとってのメリット、2. 受け入れ団体にとってのデメリット、3. 学生への教育効果、4. 学生への期待、5. 今後の課題（受け入れ団体としての課題・教育的課題）等である。その読み取りから大学におけるキャリア教育の課題を考察した。

受け入れ団体からみた成果としては、表4に示すように、学生の能力向上への寄与、社会的意義等が示された。NPOでは同じ社会像をもった仲間が未だ少なく、インターンシップに参加した学生の中から仲間を増やしていけるという利点がある。また、実施サイドとしても新しい意見を取り入れる機会にもつながり、新鮮な活力となっていることが分かった。

このように、実施団体にとって、インターンシップの受け入れは、学生のコミュニケーション能力等の向上に寄与するという社会的貢献とともに、人的資源の活性化を促すという意義も確認された。

表4 受け入れ団体側からみたインターンシップの成果

能力形成	○コミュニケーション能力の向上
社会的意義	○人脈が広がる ○NPOにとって同じ社会像を共有できる仲間を増やすことができる
NPO団体への補助	○新鮮な活力になる ○人手が足りないので助かる
自己発見	○自分にあった仕事があれば力を発揮することができる
学び	○無形の学びの獲得（教室で行う形式的なものではないもの） ○主体的な学び

それと同時に課題としては、表5に示すように、「学生側と実施側で、連絡・報告・相談のコミュニケーションがうまくとれない」など、1. 連携上の課題、2. 時間的課題、3. 教育効果に関する課題、4. 学習上の課題（学習課題・カリキュラム）、等が明らかになった。

表5 受け入れ団体側からみたインターンシップの課題

連携	○学生側と実施側で、連絡・報告・相談のコミュニケーションがうまくとれない ○温度差があり、意識のちがいがある
時間	○フォローアップや特別なプログラム作成に手間がかかる
教育効果	○団体によっては学生を「お手伝い」とみなし、教育効果が期待できない団体もまれにある。
学習課題	○無形の学びなので一時的には感じるが、忘れてしまいがち。記録や記憶に残るようにする必要がある。
カリキュラム	○大学のカリキュラムが学生主体のものになっていない ○大学でのキャリア教育の位置づけが不明確

以上の結果より、大学におけるボランティアを核とした地域連携によるキャリア教育は、仕事や生き方に対する学生の意識を高め、教育的意義のある試みであったといえる。本実践を基盤として、今後も継続して、教員養成系大学においてボランティア活動をキャリア教育の一環として推進していくことが期待される。

5. おわりに

本研究では、先行研究をもとに、ライフキャリアの視点より教員養成系大学のキャリア教育を捉えなおし、自己開発とともに他者支援（ケア）の方向性をもつ、キャリア教育のキャリア教育の枠組みを提示した。その特徴は、アカデミックキャリア、ケアサービスキャリア、およびキャリアデザイン、の3つの学びが、三位一体となり統合されるよう構成されていることである。

全体枠組みに基づき、平成20年度よりケアサービスキャリアに関するキャリア教育プログラム「ボランティア概論」「ボランティア実践」を新たに構想、実施した。

実践の結果、ボランティア経験（インターンシップ）はキャリアに対する学生の意識を高め、ボランティアを核とした地域連携によるキャリア教育は、仕事や生き方に対する学生の意識を高める試みであったといえる。

これらの取り組みによって、教員養成系大学におけるキャリア教育、すなわち自己実現から他者支援の方向性、自己開発から社会参画・社会醸成への方向性をもつ「ケア参画型キャリア教育」の教育課程を、概ね構築できたと考える。

しかし、これらの学びが今後継続して成果をあげていくには、未だ多くの課題があることが示唆された。さらに現在、経済産業省により「キャリア教育民間コーディネーター」の育成、支援システムの整備が進展しているが、本研究で得られた課題をもふまえた柔軟なシステム構築が求められる。

引用文献

- 河崎智恵(2010)．ライフキャリアの能力・態度に関する尺度構成の試み，キャリア教育研究 第 29 巻第 1 号，25-50.
- 河崎智恵（印刷中）．ライフキャリア教育における能力領域の構造化とカリキュラムモデルの作成，キャリア教育研究 第29巻第2号.
- Noddings, N. (1984). *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Normal Education*, University of California Press. (ノディンクス, N. 立山善康他 (訳) (1997). ケアリング, 晃洋書房.)

謝辞

本研究における教育実践を遂行するにあたり、奈良教育大学就職支援室長中谷昭教授をはじめ、就職支援室の教職員の方々、および奈良NPO センター（理事 仲川順子氏）の全面的なご協力を頂きました。心よりお礼申し上げます。